



ンボモ村便り



コンゴ共和国オザラ・コクア国立公園のンボモ村より

第3回

～模索がつづくゾウ対策、新たな作物は収穫待ち～

萩原幹子（JWCS プロジェクトスタッフ）
2023年3月

1. マルミミゾウの畑荒らし防御柵

（公益信託地球環境日本基金助成）

このプロジェクトでは、畑がゾウの脅威にさらされて困っている村人をただ助けるのではなく、村人たちに防御柵の設置に参加してもらうことにしています。それはこの村に住むアシスタントらが出したもので、私も賛成しました。というのも、プロジェクトで材料もスタッフの人件費もすべて負担すると、畑主はやってもらって当たり前のような感覚になり、柵のメンテナンスを積極的にしないケースがあったからです。そこで柵の設置を希望してくる畑主には、柵の杭にする木を用意してもらうことにしています。たいてい畑のすぐ脇の藪に杭に使える木が生えているので、切っておいてもらえば、スタッフが設置の際に運搬するだけでよく時間の節約にもなります。そして設置の仕事に関わったという意識があるので、杭が倒れていても放置するようなことがなくなります。

2022年7月から2023年1月までに6つの村で合計18件の畑に柵を設置しました。柵の長さにして約8キロメートルになります。すでにゾウに繰り返し荒らされて作物が残っている部分のみを囲った畑や、少しだけゾウに入られたことがあるので予防に囲っておきたいという畑があり、設置後は、ほとんどの畑主に安心感を与えています。しかし毎日のようにゾウが現れるゾーンでは、柵を設置しても畑主は夜警を続け、ゾウが近寄ってくると追いつめています。

廃油と唐辛子とリサイクルシートを使ったこの方法は、これらの材料を首都から送らなければならないのが欠点です。そのため、現地で調達できるもので、村人自身でもできる防御方法が無いか、思案続けていたのですが、現在試しているも



のがあります。それは、村人たちが毎日食べているブッシュミートの皮です。ンボモ村の住民の主要なたんぱく源は、森の野生動物の肉です。国立公園の拠点がありますが、魚が入手困難なので、網での狩猟や、狩猟の解禁期間には銃での小動物の狩猟が認められているのです。それらは毎日市場で解体されて小売りされます。

森の中でマルミミゾウが他の野生動物の死体に遭遇したら、どういう反応をするのか、という調査は聞いたことがありませんし、誰に聞いてもわかりません。臭覚が非常に敏感なゾウにとって、動物の腐敗臭は何か危険を知らせる嫌な臭いかもしれない、と思ったのです。

そこで、ンボモ村の中心から6キロほど離れた村落で、8件の農家が固まって開墾しているエリアにゾウが毎日現れるというので、そこでゾウが畑に入るゾウ道に数か所、皮を吊るしてみました。するとその日から、ゾウはその道からは畑に入らなくなりました。そこでさらに9か所に吊るし、皮が時間の経過とともにどうなるか、ゾウがそこを避ける効果はどれくらい続くかを観察しています。ちなみに腐敗臭が肉食動物を引き寄せてしまうのでは、という懸念もありましたが、この近辺にはハイエナなどはいないということでした。

2. 若者による野生動物と共存する村づくり

(プロ・ナトゥーラ・ファンド協力型助成)

前回ご報告した、若者に植えてみてもらった3か月で収穫できる作物のうち、黒目豆は順調に実をつけ、乾燥したのから順に収穫にこぎつけました。2022年12月に私が村に行った際には害虫が来始めていたので、街に戻ってから農薬を村のアシスタントに送り、噴霧器を持つ村の農家の人に手伝ってもらい、農薬を散布しました。農薬散布などは村の農業では行いませんので、これも若者たちに勉強のひとつになりました。

他の作物のうち、ポップコーン用のトウモロコシはすべて発芽したものの、残念ながら発育が悪く、実をつけずに枯れてしまいました。畑の中でも土の質にばらつきがあったようです。コンゴの作物栽培は一般に、土の準備というものはほとんどしないで、そのまま少し鍬で耕して植えるのです(野菜の栽培は別です)。ピーナツも発芽したりしなかったりで、これは砂地に適した南部のピーナツを、ここ北部で植えたせいかもしれないということになり、今度は土地に合った北部で植えられているピーナツの品種を植えてみることにしています。サツマイモは、雨が少なかったせいで発育が遅く、期待していた3か月での収穫よりも遅れて生育中です。



生育中のサツマイモ



養蜂セミナー1日目、参加者が集まってきた。報告は次号で。

さて肝心の若者たちですが、除草作業にも参加し、関心を持ち続けてくれている人と、そうでない人がいます。私が次回村に行く際には収穫物を分けて感想を聞いてみるつもりです。

農業のほか、このプロジェクトの立案時には、若者たちに現金収入をもたらす活動として、国立公園に来る観光客に売れるお土産を作れないか、という考えがありました。そこでアートのセンスのある若者はいないか、と探していたところ気づいたのです。普通は中学校に美術の授業があるのですが、地方なので教師が来ず、ンボモの中学では美術の授業がありません。そのため、若者たちにアートの才能や興味があるかどうか、という発見が難しいこと、そして若者たち自身にもそういうことを試してみる機会が無いのでした。そこで、それなら絵画教室をやってみよう、ということになり、春休みに実施する準備を進めています。その中学校の数学の先生が絵が得意で、村のお店の看板やバーなどの壁の文字も描いていて、教室を開くことに賛成してくれました。

ところでンボモ村は国立公園の拠点ということもあり、様々な外国からの支援がありますが、その一つに幼稚園の運営があります。自然を大切にす意識を小さい子どもの時から持つこと、そして教育が大事だというドイツ人女性の団体(SPAC)が幼稚園を開園してもう10年になります。その園長のコンゴ人も、ンボモ村の若者たちの問題を憂っていました。私たちのプロジェクトである、若者から村を活性化していこうという取り組みに共感してくれ、私も心強い味方を得た気分でした。



ンボモ村の幼稚園の食事